

『文字』についての提言

— 特に筆順を中心として —

小 林 久 磨

最近、学生の文字、ことに筆順が乱れている。何か一言書けと依頼をうけたのが執筆の動機である。昨年一般教養の講座で、二回程「文字の発生について」講義した。従って、それらを基に、当初、文字の発生・書体と字体・字形・筆順・簡略字体・等項をわけて論述する予定であったが筆順に止まり、他へ及ばなかった。次機に改めて検討することにし、今回は序説として、提言に止める。

近頃の学生は筆順がデタラメだとよく言われる。しかし、小学校で筆順の宿題を出したら、父母に聞いても可としたのに、誤りの字は同じであった、と教え子から聞かされる。即ち、戦後の文字意識が、読めればよい式になっていた弊害で、その年代層共通の弱点になっていると考えられる。独り今日の学生のみに限られたことではない。

それは明治の昔からも、必ずしも正しく教えられて来たとは言えない。例えば「必」字は「心にたすきを掛ける」意味の文字として覚えさせ、為に筆順までも誤まり覚えてしまった。考うるに、当時の教師の質と、ローマ字論盛況の背景も見逃せない。けれども戦後の混乱の比ではなかったろう。それは敗戦により、自国文化自体懐疑を抱く洗礼に会った故だと考えられる。

そもそも文字発生について考えても、当初は実用から出発した。それが単に記号に飽き足らず、美しく表わす方法が考えられて来た。即ち、美意識=芸術的目覚めで、後漢から六朝時代になってからだと言うのが定説である。従って戦後のそれも、亦再出発をくり返したに過ぎないと考えられ、さしてなげくこともあるまい。自然の摂理に順うべき時が来たと認識すべきである。が、いいかげんで良いとすべきではない。ではなぜ筆順が大切なのか。それはペーパーテストに出題されるから「覚える」ものではない。即ち、「筆順と字形」は不離一体のもの、であるからである。美しく書く為には、ルールがある。それが

筆順である。中国では書道のことを「書法」と呼ぶ。漢字母国のきびしい名称と言わねばなるまい。

例えば先の「必」字は、「心・ノ」では、字形が舟に櫓の形になってしまう。「必」形には絶対にならない。古来「ノ・心」(現行筆順)と「ノ・心」との二通りの書き方があった。従って古法帖を学ぶものは(教科書活字体も然り)この筆順を違えては絶対臨書出来ない。戦時日の丸ハチマキに「必勝」とあった。近時、戦学事務所に見られる必勝は間違えて書かれ、立候補者の人柄まで疑わしくなる思いがする。

その他「飛」字がある。縦画を最後に引くと、取筆は大低ハネており、如何にも不安定である。「飛」の順に書く。

斯様に見て来ると、ほんの一例であるが、「字形と筆順」の必然性が理解されよう。筆順が異なるのに字形が出来ているとしたら、それは「レタリング」であり、即ち実用的とは言えない。

然るに「馬」字は「佳」字が学校教育で先出するとし、古来の筆順が改められた。即ち「馬」字となり「佳」字と同一になった。児童生徒の負担を軽減することが理由のようである。古典にも顔真卿に、「馬」偏を現行筆順に書いたものがある。が多くはない。ことに楷書体では見当らない。タテヨコ、ヨコヨコ、マガリタテのチョンチョンチョンと唄で覚えたものである。古来の筆順は一般的に見ても、行書体(これこそ日常的 実用文字である。)に移った時大変有益かつ合理的である。

「無」字も現行は「無」字形になっている。即ち、「無」である。故に三画目の横画が最長である。これを以て「無」字形にはならない。即ち「無」である。

筆順は一般原則として、上から下へ、左から右へ続いて書くのが本来の姿である。

正しく・速く・美しく・が文字筆写の目的であるとしている。ここで「正しく」は単に筆順のみを指すのではない。それは「書き言葉」として相手に自己の意志を正確に伝えることを含んでいる。学生の論文・答案に時として「※」が書かれ文意が通らず困ることがある。これは筆順を単に学力・知識としてと

らえたテスト万能主義の悪影響を受けた現象の結果と考えられる。

その他、学生の筆写の誤りの多く共通するものに「成」字、「有」字が挙げられる。「成」字は「一」ノ彡の誤り方である。従って「盛・感・誠」等々一連の文字は皆間違っている。字形から言えば、現行では「咸・心」「咸・皿」であり、四角形になる。とりもなおさず活字化である。現今では「許容字体」として「厶・彡」等が認められた。

「有」字は「右・布・希・若」等一連である。一字一字を考えると複雑難解の如く考えられがちであるが、斯様に一つを関連応用して覚えれば容易である。ただ間違っただけで日常書き馴れ、あらたまつた時に、知識として書く時には正しく書くのでは、美しく書けないし、難解と誤解される。為に正しい筆順は書き難い、字形が整わないと言うは、本末転倒である。間違つた筆順で、いくら努力練習しても、それは無駄な努力で、上達はしない。我国が「書道」と名称し、「道」を、即ち「人」を重視するは是であり、中国人も亦尊敬している所であるが、「書法」に徹して道に入るべきである。如何なるジャンルに於いても「法」なくしては存在しない。「過ちは改むるに如かず」とは、まさに至言である。

従って漢字を覚える為に、筆順を変えるとは「角をためて牛を殺す」の暴挙と言わねばなるまい。斯く考えると、学力偏重の片鱗が伺われ、方便で改められてはならない。「正しく」とは、文字をいたわるものでなければならない。それなくして国語・国字を尊重し愛することには決してつながらぬ。まして美しくはならない。美のない所に心情は豊かにならない。無謀者が「美」を言う時、必ず「芸術」を冠し、正常でなく、変っていることあなどりの代名詞に使われる。あき盲を偽すの言として憤さえ感じる昨今である。メカニクが進化する程、手作りが珍重される今日、印刷の賀状・挨拶が軽視され、筆写が喜ばれる現代人感覚である。何も毛筆に限らない。如何なる用具であっても、用具の機能を生かした文字であれば、その人の心が伝わる。印刷の隅の一行、また、たどたどしい文字であっても、仮りに訥弁の文章であっても誠意の通ずることを知るべきである。漢字を多く知り、達筆であることが、古来教養としてとらえられて来た。が故にボロを出すまいとして書道アレルギーになつてい

る。ましてや上手・下手を遺伝のせいにするは言語道断、何の医学的根拠もない。それは古くは、小野道風、近くは会津八一で立証されよう。学ぶ側からは、努力不足の弁解であり、教師側からは、熱意不足の弁に過ぎない。要は「己の個性を発見し、正しいルールに従って自己を表現する」にある。「書は人を表わす」とは、古人の言であり、意識下の個性を引き出すのが教師の責務と考える。

筆跡鑑定に、時々法廷に出される。如何に用具が異ろうとも、また意識的に替えて書かれても、同一筆者は同一の特徴（筆順の誤りも一因）を持つ。例えば右ききの人が、左手で書いたとしても、人間性まで変えられない。

従って、皆美しい文字が書ける素質を持っている。皆個性のある字が書ける。ただ個性とは、生れ乍らそのままの個性を言うのではない。磨かれた個性を指す。個々顔が異なる如く、書も亦異って然り。七不思議の一に、アルファベット圏の国が、サインだけで用が足せるのに、漢字・仮名使用国はサインだけでは通用せず、「印」に重きを置くことである。過去は別として「印」こそ機械文明発達の今日、如何様にも偽作出来るのに。筆者こそ極め手であり、尊重される世の中にしたいものである。

所謂お習字を（ペン習字も）習い初めた人から、先生のお手本そっくりの挨拶状を貰う時ほど空しく感じることはない。そこには書いた「人」が存在しないからである。がまだ愛嬌があつていい。それが達筆を誇示されていては嫌悪を覚える。

筆順は厳密に言って楷書体だけにしか存在しない。行・草体から、隷・篆・古文に至っては「無」と言ってもよい。勿論公約数的なルールは存在する。従ってちょっと基礎的なものをしっかり覚えれば、難解なものではない。現今日常の書はむしろ行書体が主である。行書体こそが実用的と言うべきである。ならば楷書体から依って来るものが多い。書体発生順から見ても実証される。

（小生「流沙墜問の研究」参照）例えば「一」 丿」と書いている人は「殂」字となり、全く読めない。「無」字「馬」字も然り。これは字体問題とも関連する。ただ簡略にする為に、点画を省けばよいと言う暴言は許されない。戦後の混乱期に定められた現行字体は、じっくり検討されて然るべきものと考えて

いる。が極めて悲感的現状である。次機指導要領改訂に当り、どこまで合理に基くか、お手並拝見としか、すべがない。今夏にも中間まとめが出る接迫さであるから。

一言いえば「書」字は「隹」と改めては如何。これは「曰」を省いただけではない。行書体である。即ち「行書体の楷書字体化」の結果である。(木簡)

この問題に関し、中国派遣までされたが、日・中一体化は不可能の結論が出たようである。中国の簡易化の目標は我国と異なるが、兼ねてより敬意をもって注視していた。それを是とするものではないが、所謂、多くは音通で処理し(古く漢代に前例あり)、行・草・古文等に基いてなされている。蛇足乍らせめて我国教育漢字(881字)は速く検討したいと考えている。

そして、結論から言えば、我国の漢字体は、「活字体と筆写体」とを設けるべきである。(名称は如何でも可)、読み易い文字(コンピューター名文字、印刷活字等)、と書き易い文字とがあつてよい。これを現今の如く、一元化する所に苦悩があり、混乱・複雑化されていると考える。即ち、教育的観点から見ても、人間不在の活字化(人間のメカニック化)にしている。個性無視も甚しい。アルファベット圏に、活字体と筆写体とがあるが如くに。(現行の止めハネ等末端で問題外である。)

(香川大学教授：1976.7.1 記)